

2. 盲学校における漢字指導の必要性について

栃木県立盲学校 長谷部 明

I はじめに

人間にとて文字は重要な道具である。文字によって人は自分の意想を、遠くの、あるいは時を隔てた相手に伝える事ができる。視覚障害者にとってそれは点字であり、点字の使用により、盲教育は急速な進歩をとげてきた。しかし、はたしてこの偉大なる点字による教育だけでよいのだろうか。晴眼者の文字文化には、漢字が重要な意味をもつものとして存在し、文章の中での漢字の占める割合も極めて多いのである。そこで点訳された書物との間には理解力の差等が生じてくるのである。この隔たりをどうして埋めていけばよいのだろうか。

近年、オプタコンやコンピューターなどによる高度な代行技術が進歩し、そ

れらの欠点を解消しようとしている。その現状の中で、盲学校に勤める一職員として、普通文字、特に漢字指導の必要について、改めて考えてみたい。

II 点字か普通文字か

1. 歴史の中から

わが国の盲学校教育で最初に使われた教科書は、楽善会訓盲院で作成された『詞之掻』などを含む凸字本であった。明治当初は、普通文字を使用していたのである。点字は1829年、フランスのルイ＝ブライユによって発明されたが、わが国で使用されるのは明治23年以降ということになる。石川倉次によって考案された『日本訓盲点字』の完成は、盲人の「読み・書き」に画期的な転換をもたらした。

しかし、全部の流れが一変したわけではない。古川（1913）は、次のように述べている。「若し文字の書き方を知らざる時は、文章の意味を理解し、若しくは普通人と手紙の往復に困難を來す」「今日の盲人教育は主として点字のみを使用するを以って自然日本文学を知ること能はず」「盲人を教育する学校にては勿論点字を用ふると共に……五画以下の文字を必ず教ふべきなり」。これらのこととは、大正・昭和と経て、はたして現在において解決されているだろうか。確かに電話があり、テレビ・ラジオもあり、大半は解決したかのように思える。

しかし、本当にそうなのだろうか。手紙も日本文学も以前とかわらず、美しい日本の文化として、われわれのまわりをとりかこみ、盲児たちは、それらを学校において毎日学んでいるではないか。

2. 視覚障害と使用文字

歩行指導員養成講習会第13期の研究発表「盲学校における全盲児・生への墨字指導の実態」をみると、そのおおまかなものを知ることができる。本校においてもこのアンケートと大差はなく、ごく一般的に墨字指導が行われている。だが、ここで問題になってくるのは、「全盲児・生」とは、いったいどの程度までの視力を失なった児童・生徒をさしているのかということである。それは強度の弱視児の場合には、使用する文字の選択が複雑であって、点字と普通文字を両用する子どもたちが最近多いからである。

活字が読めない程度に視力が障害されると、一般的に点字が勧められる（昭和30年代前半までの盲学校においては、普通文字の読み書きにそう不自由も感じられない程度の弱視児に対してまで、目かくしをさせて点字を練習させていた時期もあった）。しかし盲学校在籍者をみても視力分布は広く、一口に使用文字を決定することは困難である。このことについて、谷村・大川原・藤田ら（1977）の資料（表1）が参考になる。

視力と使用文字別使用者の関係は、全体の38.6%が点字を、54.6%が普通文字を使い、残りの6.7%が点字と普通文字を両用しているということがわかる。そしてこの関係を視力について百分率曲線として示してあるのが図1である。

視力の0.02のところで普通文字使用者と点字使用者の曲線が交差している。普通文字と点字の両方を使い分けているものの頻度がやはり視力0.02から0.03あたりにピークをもっていることもわかる。このことは視力が0.01以下になると点字解読が主体となり、0.04以上では視力による学習が可能なことを示している。文字と点字を両用しているものの多い視力0.01～0.05間の子は、残有視力に固執する傾向があるのかもしれない。図1の曲線から、頻度はごく少ないが0.01未満でも普通文字への執着を持つ子もうかがわれる。この気持ちは、決しておろそかにすべきではない。

表1. 点字・普通文字使用者の視力別比率

視力	使用文字	点字	活字	両者	0.15	5.2	0.4	8.6	4.0
0	15.8	40.4		0.3	0.25	6.6	0.4	11.2	3.7
光 覚	5.8	14.8		0.3	0.3	5.0		8.6	1.9
手動弁	3.1	7.8	0.1		0.4	2.3		4.0	0.8
指数弁	2.8	6.3	1.4	3.4	0.5	1.7		3.0	1.1
0.01	3.9	7.5	1.2	6.4	0.6	0.9	0.1	1.5	0.8
0.02	4.5	5.6	3.0	13.8	0.7	0.6		1.0	
0.03	4.1	3.5	3.9	12.2	0.8	0.4		0.6	
0.04	4.2	2.5	4.8	10.1	0.9	0.2		0.3	
0.05	3.8	1.3	5.2	8.8	1.0	0.3		0.6	
0.06	3.8	1.2	5.4	6.4	1.2	0.2		0.3	
0.07	2.4	0.4	3.7	3.4	1.5	0.1		0.1	
0.08	3.4	0.5	5.4	3.4	2.0	0.04		0.1	
0.09	2.2	0.3	3.6	1.9	測定不能	0.8	1.6	0.2	0.8
0.1	12.0	1.1	19.6	11.7	不明	2.8	4.2	1.7	4.0
0.12	0.2		0.4	0.5	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0

(「視覚障害教育の理論と実践」より)

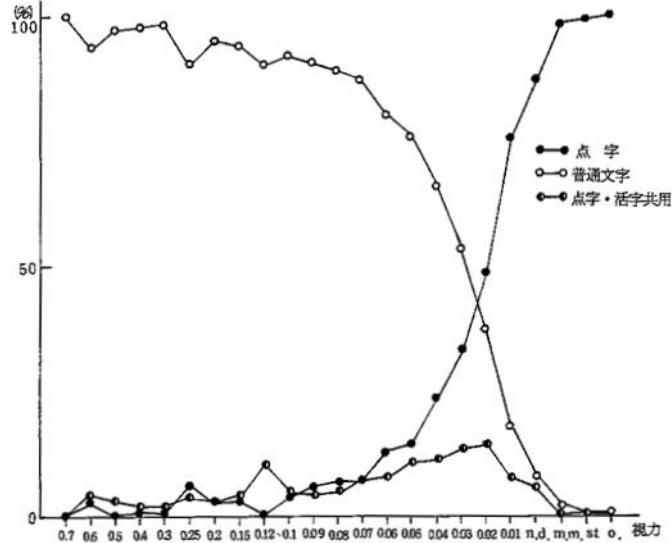


図1. 点字・普通文字使用者の視力別比率

また、その反面、保有する視力の活用を過大視して、いつまでも読みの速度があがらなかったり、読み誤りが少なくならないようでは学習の能率という面からはかえって問題になる。そのことが子どもの学習意欲を低下させる原因となることも少なくない。そこで、眼病患によっては、今後の学校生活や将来の社会生活を送るうえで、最も有効な文字は何かという観点を優先させが必要であろう。

III 漢字指導の必要性

1. 日本語の理解

「コウ ミドリニシテ トリ イヨイヨ シロク ヤマ アオクシテ ハナモエント ホップス……。」これは漢文を点訳したものを、墨字に直したものである。下線部の意味はもちろん注としてついているが、その注が離れているため、見つけることに時間をついやす。盲学校において漢文を指導することは、想像以上に難かしい。現行の指導方法にも問題があるが、内容的な理解度でもやはり普通文字の「江碧鳥逾白、山青花欲燃……。」とでは差があるよう思える。

点字は仮名と同じ表音文字である。これに対して日本語の表記は一般的に漢字仮名混り文である。漢字は音だけでなく文字に意味をもっている。たとえば、「親愛」という言葉の「親」という文字は、「したしい」という意味を持っていて、これが親友、親交、親近などへも拡充して用いられる。「愛」についても、愛情、友愛等々同様である。そして、「親」と「愛」を合わせて親愛ができる。したがって「親愛」は、ただ、仲よく親しみを感じるという意味だけにとどまらず、この熟語を見る場合、それぞれの文字の意味から、いろいろの場合や状況を浮かべることが伴っている。これが「シンアイ」という表音だけの場合はそれだけの豊富さをもちえないのではないだろうか。この意味から漢字には、幅と広さがあり、これが漢字のすばらしさと言えるのだろう。そういう点から考えてみると、バーバリズムにも関係してくるのではないだろうか。つまり、盲児が普通児と同じような言語で反応したからといって普通児の持っている言語内容と盲児の持っているそれとが、全く同じものとは限らないとい

うことである。点字本は漢字仮名混りの記述を点訳したものだから、同じ内容を読んでいると考えられ（それで充分実用的な役割を果たしているのであるが）、表音文字と表意文字とのあいだに見られる親疎の差が見おとされがちである。これらのことを見て、文章表記の言葉の使い方や言葉の持っている感情、熟語などについて、ていねいに指導する必要があろう。

次に、同音異義語についても、視覚障害者の日本語の理解と関係があるので考えておかねばならない。「化学」と「科学」・「学界」と「学会」・「市立」と「私立」など、例をあげればきりがない。晴眼者にとってもちろんあるが、視覚障害者には特に判別がつきにくい。

それでは何故そのようなことが起こりうるのだろうか。ためしに、「コウ」という漢字を常用漢字の中からすべて抜き出してみる。

「口・工・公・孔・功・巧・広・甲・行・交・光・后・向・好・江・考・坑・孝・抗・攻・更・効・幸・拘・肯・香・侯・厚・洪・恒・後・皇・紅・荒・高・候・校・耕・耗・航・貢・降・康・控・黃・慌・港・硬・絞・項・鉱・溝・構・綱・酵・稿・興・衡・鋼・講・購・恋・請」と64個ある。古くは「カウ」「カフ」「コウ」「コフ」「クワウ」などと発音され、分けられていたようであるが、現在に至ってはその区別がないのである。そこで一つの読み方で漢字はいくつぐらいあるのかと考えてみると、常用漢字数が1945で、漢音による読み方が270あると言われているから単純に計算して、 $1945 \div 270 = 7.2$ ということになる。つまり、平均してひとつの読み方に7字弱の漢字が属していることになる。逆に言えば、平均して漢字7字弱は同音で読まれることになる。この中には専門的なものもあるし、また今ではほとんど使われないものもあるので、こんなに複雑になるとは思えないが、熟語になったりするとまぎらわしい同音語が増えてくる。これらのことを見えて、視覚でとらえられない盲児に対しては、折りにふれ、それらの違いを知らせてゆく必要がある。

2. 晴眼者との円滑なコミュニケーションと、社会参加

漢字は私たちのまわりをとりまいている。そのひとつに氏名がある。日本人の大部分は、漢字表記による氏名を持っている。これを普通文字で知っていることは、視覚障害者にとって大切なことである。そのよい例は、志村（1978）

にみられる。「これは、『私も漢字の勉強をしたい』と申し出があったときのO・Mの話である。『盲学校の休み時間に、弱視の友だちと話をしているとき、人の名前が話題にのぼることがよくある。それらの友だちは、人の名前をどんな漢字で表わすかを伝えあう。そんなとき、漢字を知らないO・Mは話に加われず、ひどく劣等感を感ずる』という。われわれは、自分の名前をその漢字とともに意味的に把握している。「ヒロシ」という名前は多い。しかし、それぞれ漢字による表現が異なる。「ヒロシ」という名の人たちは、同じ発音の名前の人たちに対して、漢字が異なることで無意識的に独自性を保っているといえなくもない。（中略）『あ、そういう意味の字なんですか。こんなに複雑んですね』と感想をもらしたことがあった。そして、これで少しは名前の話題にも加われると喜んでいた。」（志村、1978. P130）

以上の話は学校でのことであるが、社会においても日常茶飯のことである。氏名や住所などの普通文字を知っていれば、晴眼者との円滑なコミュニケーションや社会参加の一助となることも忘れてはならない。

3. 漢点字

1で述べた同音異義の問題解消や、マスあけの必要悪といった点から考えだされてきた漢点字が、コンピューターと連結し、最近盲学校にも取り入れ始められている。漢字仮名混り文への変換という、まことに偉大な発明である。現在、既にふたつの漢点字の体系が発表されている。長谷川貞夫による漢点字体系の根幹をなすものは、漢字の音読みと訓読みの相違で、両者を組み合せることにより漢点を構成している。これに対し、川上泰一の漢点字体系では、従来の6個の点の上に0と7の点を設置して、この2点で漢字であることを表現するようとしてある。これに加え、漢字の部首のうち、おもに偏をひとつにまとめて、それに旁をつけるといった形で8点の点2マスで漢字を示している。

以上のことわざるよう、6点式にしても、8点式にしても、普通文字が基本となっている。さまざまな問題を残すとしても、もし学校に取り入れてゆくのならば、漢字指導はやはりここでも必要となってくる。

4. 感覚代行器機の進歩

○オプタコン

アメリカなどでは、オプタコンの利用によって、視覚障害者も晴眼者とあまりかわらない職域を持つようになったという。オプタコンがあれば、点訳を待たずについに印刷物が読めるし、人手をかりずに書類や手紙を読むこともできる。まさしく視覚障害者にとって強い味方であり、大きな革命ともいえる。しかし、日本の視覚障害者にとってはその事情が変わり、その大きな恩恵を直接こうむるには障害がある。それは今まで幾度となく述べてきた漢字の存在である。われわれ日本人は常に漢字仮名混り文によって表記するため、文字情報の受容が困難になってくるのである。だが、盲児たちの知的生活をよりよいものにし、社会的自立に大きなプラスをもたらすものであるとするならば、これらの困難は乗り越えなければならない問題であろう。そのためには、レーズライターなどを有効的に使って、比較的容易なものからの系統的な漢字の指導が必要である。

○コンピューター

点字の体系が、6点の位置にそれぞれあるか無いかの2通りの組み合せがあるので、コンピューターの2進数の体系と似かよっているため、点字とコンピューターが結びつくようである。木塚（1981）は、点字の短所を次のようにあげ、コンピューターによる短所の解消を述べている。

「<点字短所>

- ①自分で書いた点字を読み返して誤りを見いだしても、訂正や削除あるいは追加などが容易にできない。
- ②1ページの割付けや表のレイアウトの変更などの編集が容易にはできない。
- ③普通の文字から点訳に多くの人手と時間がかかるので、情報の入手が制限されるとともに、読みたいとき即座に入手できない。
- ④1部しかない貴重な点訳原本を。校正・編集した後に、必要部数を複製することが、容易にはできない。
- ⑤点字で書かれているものを、普通文字に容易に変換することができない。
- ⑥話したことばを点字に変換したり、点字を音声に変換することが容易にはできない。
- ⑦紙に書かれた点字はかさばり、収納や運搬あるいは輸送に不便である。

⑧辞書や百科事典あるいは各種の資料が点訳しにくく、点訳してあっても必要な箇所の検索がすばやくできない。

⑨亜鉛板は体積と重量ともに多いので、多種目の原板を収納するのが容易ではない。

⑩点字楽譜を読みながら両手を使う作業ができない。

⑪点字で筆算が容易にできない。

⑫点図の作成や読み取りが容易にはできない。」等が記されている。これをコンピューターによって全部解決することはむずかしいだろう。しかし現在においてはペーパーレス・ブレールができ、ある程度点字の短所は解決されてきている。さらに自動点訳、自動代書の時代をむかえつつある。嘉手川・清水（1983）によれば、自動点訳の「漢字のかなふりの精度が約98%、分かち書きのそれは85%」（嘉手川・清水、1983, P71）という結果が出てきている。これらは前記の点字の短所を解決するものであり、また、点字と普通文字の世界をより縮めてゆくことでもある。

5. 三療

就職域の拡大については、いろいろの見方があり難しい問題をはらんでいる。前記のオプタコンやコンピューターの利用は、それらに深い関係をもっている。ここでは従来から盲人の天職ともいわれている三療と漢字について述べてゆきたい。

三療には、圧倒的に多くの視覚障害者が従事している。この三療の資格を取得するためには、「けいらく経絡」などの中国系の知識を習得しなければならない。芹沢（1972）によれば、「経穴名は、古くは中国でさだめられたのである。非常に難解である。しかし、なぜ名称をつけたかを知れば理解が進み、記憶するにも便利になり、臨牀上にも役立つことになる」と述べている。すなわち、ツボなどの名称はすべて中国から伝来してきたもので、その意味を理解するには、漢字の知識なくしては理解・記憶が難かしいということである。晴眼者や中途失明者など、漢字の知識を有するものが資格取得にも有利であることは言うまでもない。このことからも、漢字指導の必要性が出てくるのである。

IV おわりに

これまで、盲学校における漢字指導の必要性について述べてきた。しかし、その具体的方法については今回のレポートでは考察できなかった。これは今後の課題として、実践の中から研究してゆく必要がある。その実践に際しての配慮の一助とすべき早期教育の必要性について述べたい。

視覚障害児が視覚以外の感覚を使って、社会を認知して、一個人として社会に参加してゆくための言語・行動を身につけてゆくのは、初步的な行動の積み重ねであり、一つ一つ考えて工夫してゆかねばならない。途中から急に複雑な行動をとるということはないのだから、早くから教育が必要になってくる。例えば、物の形がわかるということは、晴眼児の場合に目が見えさえすれば何もかもわかるというわけではなく、経験を通して目の使い方がだんだんつくられてゆき、目が正しく動くようになって、はじめて形がわかるわけである。その点では盲児が手の使い方をだんだん覚え、手の感覚を通して形がわかるようになると言える。（ただし、複雑なものは、そう簡単にはゆかない。）つまり、視覚障害児が指先で普通文字を読むことができる触読器のようなものが開発されても、もし盲児が手で複雑な形、例えば、平仮名や漢字や細かな形を知ることができなければ、せっかくのよい器具があっても利用できず、こうした経験を積むことができるよう、比較的早い時期から、系統的な指導が必要であることを忘れてはならない。

また、普通文字、とくに漢字指導の場合には、漢字の語源やそれから派生してきた語句などを教師側がよく理解しておかねばならない。それによって盲児に文字の形のもつおもしろさ（意義）を理解させることができ、興味をも持って普通文字を学習してゆく動機づけにもなるだろう。

盲学校における漢字指導は、視覚障害によってハンディキャップをもつ盲児たちに、日本語の理解を深めさせ、自由な社会参加のためには、やはり必要である。

参考文献

- 1) 小林一弘、凸字による読み書きからの発展 視覚障害教育百年のあゆみ

第一法規、1976

- 2) 嘉手川繁三・清水則之、日本語点訳システム漢字かな混り文から点字まで
コンピューター利用による感覚代行・補償の方法に関する研究、日本アイ・ビ
ー・エム、1983
- 3) 川上泰一、漢点字の進路、盲教育第52号、日本盲学校教育研究会、1981
- 4) 木塚泰弘 点字とコンピューター、盲教育第52号、日本盲学校教育研究会、
1981
- 5) 岩淵悦太郎、現代の言葉、ミリオン・ブックス、1965
- 6) 志村洋、文字パターンの決定的特徴の学習と「レーズライター」の活用、
盲教育におけるオプタコンの活用に関する実証的研究、国立特殊教育総合研究
所、1978
- 7) 鈴木悦太郎、漢字の特質、漢字、文化庁、1982
- 8) 芹沢勝助、経絡・經穴編、漢方概論 1972
- 9) 谷村裕・大川原潔・藤田千代、視覚障害児童生徒の判別——点字・活字の
使用と視力の関係——、視覚障害教育の理論と実践、1977
- 10) 小玉みゆき、盲学校における全盲児・生への墨字指導の実態——アンケ
ト調査結果より——、歩行指導員養成講習会第13期研究論文集 日本ライトハ
ウス、1983